

P-170 高齢者肺癌手術症例の検討(低肺機能・高齢者肺癌1, 第47回日本肺癌学会総会)

著者	山本 真一, 佐藤 幸夫, 長谷川 剛, 大谷 真一, 金井 義彦, 手塚 康裕, 遠藤 俊輔, 手塚 憲志, 斉藤 紀子, 塚田 博, 蘇原 泰則
雑誌名	肺癌
巻	46
号	5
ページ	568
発行年	2006-11-05
権利	日本肺癌学会
URL	http://hdl.handle.net/2241/00134118

P-170 高齢者肺癌手術症例の検討

山本 真一・佐藤 幸夫・長谷川 剛・大谷 真一
金井 義彦・手塚 康裕・遠藤 俊輔・手塚 憲志
斉藤 紀子・塚田 博・蘇原 泰則
自治医科大学 呼吸器外科

【目的】当院における高齢者肺癌手術症例に対して、手術前後の合併症と術式選択等について検討した。【対象】1986年から2005年までの20年間で80歳以上の肺癌手術症例33例を対象とした。【結果】年齢：80歳～85歳（平均81.8歳）、性別：男/女=22例/11例、組織型：腺癌/扁平上皮癌/大細胞癌=11例/18例/5例（重複癌含む）。術前合併症は16例に認められ、内訳は低肺機能、狭心症、糖尿病、間質性肺炎、脳梗塞、肺癌術後、食道癌術後などであった。術式に関しては、2群郭清まで施行しえた症例は3例のみであり、1群郭清と2群サンプリングにとどめた症例が多かった。また、区域切除までとした症例は2例あり、部分切除にとどめた症例は3例であった。術後合併症は11例に認め、術式との関連は見られなかった。内訳は気管切開等の処置を要する喀痰排出困難、不整脈、肺炎、髄膜炎であった。周術期死亡はなく、全員独歩退院可能であった。【まとめ】高齢者は何らかの基礎疾患を有することが多く、肺癌根治術としての標準術式が遂行できず縮小手術とせざるを得ないことが多い。それにもかかわらず術後合併症の頻度が高いことより、注意深い術後管理が必要であると考えられた。